

木幡

世阿弥作

ワキ 伏見某の家臣

女 左衛門の妻

シテ 木幡左衛門

ツレ女 乳母

母 妻の母

地は 山城

季は 九月

ワキ詞

「かやうに候ふ者は。伏見の里に住居する者にて候。さても頼み奉り候ふ人は。はや年たけ給ひたる御事にて候。又息女の候ふは。あたり近き木幡の左衛門殿と申す御方に御座候。いつもかの御方より御音信の候。今日は我々文を持つて木幡へ参り候。如何に案内申し候。伏見より御使に参りたるよし。それく御申し候へ。

女詞

「伏見よりと申すか。人までもなしこなたへ来り候

へ。

ワキ詞

「殿の御留守にてありげに候。あら嬉しや候。如何に申し候。伏見より御文にて候ふ是御覧候へ。

女

「あら嬉しや文と申すか。まづく見うずるにて候。

サシ

「げにや世の中に。住まば心に任せても。立ち添ひ頼む柞の森の。頼む木陰に有るべきに。処々の住居とて。そはねば親子の契りとても。

下歌地

「薄き衣のひとへにて。伏見の里の竹の庵。夜寒知

られて痛はしや。

上歌

「羊の歩み隙の駒。く。行くや月日も重なりて。

秋も名残か長月の。夕べの空や村時雨。雲となり
雨となる。木の葉の風の音までも。心細さの夕べ
かな。く。

シテ詞

「是は木幡の左衛門何がしにて候。今朝とくより罷
り出で候ひて。事の外給べ酔ひ。只今我宿に帰り
候。其文は何くよりの文にて候ふぞ。

女

「いやこれはたゞ。

シテ

「いや給はり候へ。見参らせ候ふべし。

女カゝル

「女心のはかなさは。恥かしとのみ思ふばかりに。
口の内にぞ隠しける。

シテ詞

「さればこそ始めより。不審なりつる男文。見せて
は何と業平の。鬼一口に飲みたる文。今は疑ふ処
もなしと。

地

「男は腹の立つまゝに。く。又は一つは酔狂の。刀

を抜きて刺し殺し。身はいたづらになしにけり。
く。

ツレ女 「あら悲しや。唯今の文を御不審あり殺し参らせられ候ふと申すか。先づく歸つて母御に此由申さうずるにて候。

母 「いかに乳母。さていつの事と申すぞ。

ツレ女 「只今の事にて御入り候。

母 「さて其故は如何に。

女 「さん候是より参り候ふ御文を。痴者文と思し召して。

母 「さも荒けなき人心。

二人 「木幡の里の口なしの。言はぬは道理情なや。苦しや木幡山。嶮しき道に馬はなし。徒歩はだしにて来ぬれども。最期を見ぬぞ悲しき。

シテ詞 「如何に申し候。かやうの事は親も子も知らぬ事にて候。はやく御歸り候へ。

ツレ女

「仰はさる御事にて候へども。かやうになり給ひても。無き名を取り給はん事。世上の聞えも見苦し候へば。浅ましながら母御より参らせられ候ふ文を。取り出だし御覧候へかし。」

シテ

「さては未だ御不審候ふか。是は又安き御事なりと。男は再び刀を抜き。母御の嘆かせ給ふなる。心を知れば安方の。」

地

「鳥も音を鳴く血の涙。紅に染める此文を。取り出

シテ詞

だし見れば浅ましや。目もあてられぬ有様。く。

「さらば是にて高く読み候ふべし。それにてよく聞し召し候へ。其後は久しく文にても申さず候。御ゆかしく思ひ参らせ候。又秋も末になり候へば。深草山の紅葉もやうくなるべし。思召し立ちて御覧候へ。又御恥かしき申事ながら。早秋深き夜嵐の。」

母

「なふく暫く。あたりに人もや聞き候はん。さの

み高くな読み給ひそ。

二人「はや秋深き夜嵐の。さらでも寒き老の寐覚の。薄小袖一つ給ひ給へ。かまへてく此文を。殿には隠させ給ふべし。もしも落ち散る事もやありなん。あだにも置かで此文を。煙となさせ給ふべし。

地「文は残るに主は今。煙とならん其跡に。留まらん思ひの。母が嘆きを如何にせん。

クセ「げにや嘆きても。返らぬ水のあはれ世に。澄みて

濁らぬ人心。愚なるかなたらちねの。中にゆきかふ其文を。恥かしとのみ思草の。忍ぶ気色を生憎に。猶夕顔の露の身の。消えて帰らぬ面影を。見るこそはかなかりけれ。

シテ「今はかひなき妻琴の。同じ道にと思ひ切り。腰の刀に手を掛くれば。こは如何に浅ましやと。母や乳母は取り付きて。我に思ひを筑波嶺の。このもかのもとに別れなば。ながらふべきか情なやと。留

め給へば力なく。理りや面目なや。何となるべき
身の果。是を出離の便りにて。く。様かへ妻の
亡き跡を。母諸共にとふ法の。蓮も同じ二世の縁。
尽きぬ契となりにけり。く。